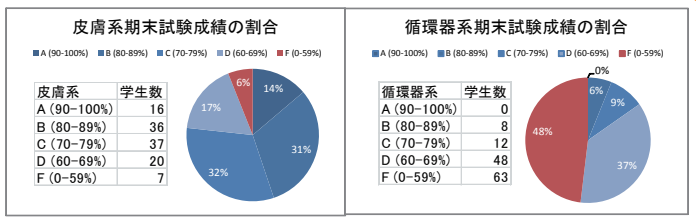


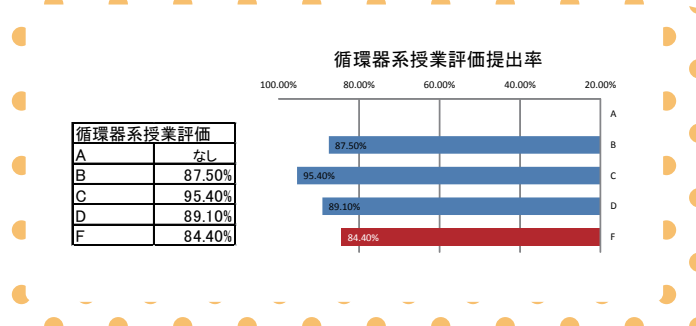
Introduction

本学のeラーニングシステム「e自主自学」の使用が開始されて1年半になる。e自主自学は、ブレンド型教育による教育効果の向上を目的で進められている。現在のところ、教職員にも学生にも浸透しつつあり、使用の拡大がみられる。しかし、支援を要する学生の早期の抽出とその活用はまだ十分ではない。今回我々は、**e自主自学の課題の提出を任意では行わない学生は、成績下位者になりやすい**と仮定し、学生に対して使用を義務と任意とに分類した場合、その使用率と期末試験の成績との相関性を比較した。それにより、支援を要する学生の早期の抽出が可能か検討した。

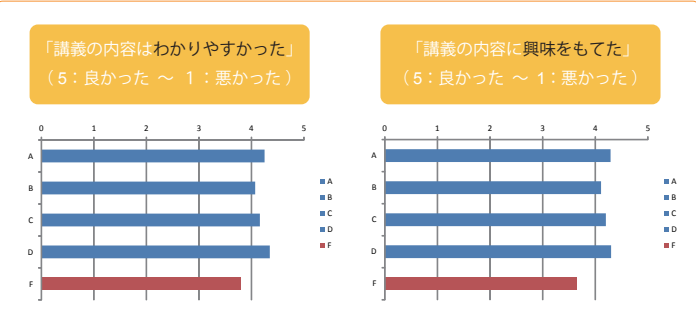
学生の成績分布



Results 1 義務 成績別課題の提出率



Results 3 成績別授業評価での回答



Methods

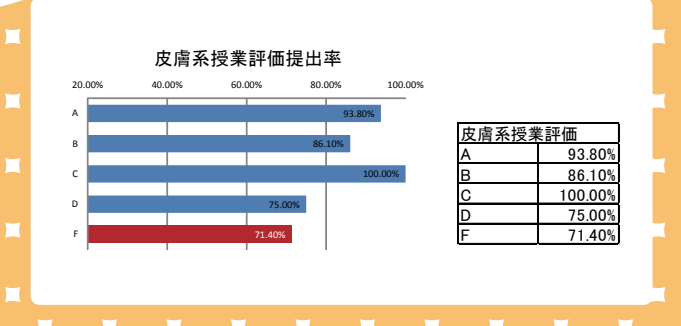
1 2011年度の皮膚系の授業と2012年度の循環器系の授業のeラーニング使用と成績の相関関係の比較を行った。両科とも共通した機能の使用がみられたこととほぼ同じ学生が対象である臨床の授業であることが選定の理由である。

	義務	任意
皮膚系	小テスト	授業評価
		資料閲覧
循環器系	小テスト	
	授業評価	資料閲覧

2 義務として設定した皮膚系と循環器系の小テストと、循環器系の学生による授業評価に関し、提出率と期末試験の成績との相関性を調査した。また、任意として設定した皮膚系の資料閲覧と、授業評価、循環器系の資料閲覧の回数と期末試験の成績との関連性を調査した。

3 任意で回答させた授業評価の項目から、学生の理解度と興味の高さについて判定し、期末試験の成績との関連を調査した。

Results 2 任意 成績別課題の提出率



Conclusion

試験の成績下位者は、任意の資料閲覧率と任意の授業評価内の回答を確認することにより、ある程度予測可能であることがわかった。成績下位の学生を早期に支援するために、使用を義務とせず、任意の課題への学生の取り組みを分析し、使用率が低いことや授業評価の内容などを予見因子とすれば、学生への早期支援に役立つ可能性がある。